

特別支援学校（知・肢・病）教育実習に関する 実習生の意識調査

—特別支援学校教育実習初年度の学生を対象に—

河口 麻希・田村知津子・名島 潤慈・佐藤 真澄

An Investigation Into Pre-Service Teacher's Perceptions of Teaching Practice at Special Needs Schools : A Questionnaire Survey With Inaugural Students in the Special Needs Education Course

Maki KAWAGUCHI, Chizuko TAMURA, Junji NAJIMA, Masumi SATOH

1. 問題と目的

近年、特別支援教育の対象児が増加することとともに保育・教育実践において特別支援教育についての知識や理解が求められるようになってきている。そのため、特別支援学校の教諭だけでなく保育・教育職に就く際に特別支援学校教諭免許状を取得することや科目を受講することが推進されている（文部科学省，2015）。これを背景とし、教員養成大学においては特別支援教育に関する科目を設定したり、免許法認定講習を実施したりしている。また、2016年度段階で特別支援学校教諭一種免許状を取得できる大学は183校あり（文部科学省，2016）、今後さらに特別支援学校教諭の免許状取得を目指す学生が増えてくると考えられる。そのため、教員養成段階でも特別支援学校教員免許状を取得するための教育実習を実施する中で、様々な成果や課題が表面化してくると推察される。

池田ら（2013）は、特別支援学校の教育実習における学生の意識を明らかにしている。その結果、実習不安が実習を通した子どもとの関わりや授業を経験することで満足感になっていた。その他にも、坂田ら（2007）も附属特別支援学校での教育実習について実習生を対象とした調査を行っている。しかし、特別支援学校での実習を通した学生の不安や期待といった心理面や学びについての知見はあまり蓄積されていない。特に、今後特別支援学校教諭免許状の取得を目指す学生が増加すると考えられる中で、実習での意識調査を実施することの必要性は高いのではないだろうか。

山口学芸大学では2017年度、特別支援学校免許状を取得する1期生を送り出すこととなり、特別支援教育実習（以下、特支実習）を行った。その際に、特支実習が初年度であることから前例のない中で実習生の不安は大きかったと考えられる。仲宗根ら（2017）では、3年次生と4年次生が共に教育実習事前指導や教職実践演習の授業を受けたことで、教員からの意見ではなく、先輩の体験を基にしたコメントに説得力があったという意見があったことを述べている。このように、実習を経験した先輩からの助言がない状況での実習を経験してきた実習生にとって、昨年度の前例がない状況における不安や、実習に関する経験の情報が何もない中での期待はどのよう

なものであろうか。

そこで、本研究では、特別支援学校教育実習を実施した初年度の実習生が、実習においてどのような期待や不安があったのか、また、具体的に実習の経験を基にどのような学びをしたのかについて事後アンケートを基に検討することを目的とする。

2. 方法

1) 対象

2017年度に特別支援教育実習を行った4年次生を対象とし無記名で回答を求めた。有効回答数は48名であった。項目によって回答率は100%でないものもあったが、その場合には回答数を基に割合を算出した。なお、48名はそれぞれ、山口県内の総合支援学校(計12校)と県外の特別支援学校(計7校)で2週間の特支実習を行った。

対象者の取得予定の資格・免許に関する内訳は、保育士22名、幼稚園教諭40名、小学校35名であった。保育士資格を取る予定の学生は2,3年次に保育実習、幼稚園教諭免許状をとる予定の学生は2,4年次に幼稚園実習、小学校教諭免許状を取る予定の学生は3年次に小学校実習を行っている。

2) 調査方法

特別支援教育実習指導の授業内において、事後授業の開始時に調査用紙を配布しその場で回答してもらった。

3) 倫理的配慮

対象者へは誰が記入したかわからないこと、また、記入の内容が成績には反映されないことを説明し調査を実施した。

3. 結果及び考察

1) 障害のある方との接触経験

「大学入学後から特支実習の前に、障害のある方と接する経験がありましたか?」という質問に対し、接触経験があると回答したのは40名であった。その内容の内訳は「ボランティア」が25名、「実習・授業」が11名、「親戚・友達等の身近な人」が5名、「学生支援員」が2名であった。

このことからほとんどの学生が大学入学後から特支実習前に障害のある方との接触経験があったことがあり、最も多かったボランティアでは「総合支援学校のボランティア」が13名だった。

2) 障害のある方への考え方

「特支実習を通して、障害のある方への考え方は変わりましたか?」という質問に対し、35名が変わったと回答した。つまり7割が実習後に障害のある方への考え方に変化があった。その内容としては、「関わるのが楽しいと感じるようになった」や「暗いイメージが明るくなった」のような障害のある方に対して前向きに捉えることができるようになったという気持ちの変化に関することや、「年齢に合った接し方や話し方に気を付ける」や「支援のし過ぎはその人の発達を妨げてしまう」といった接し方や支援の仕方についてあがっていた。また、当事者についても

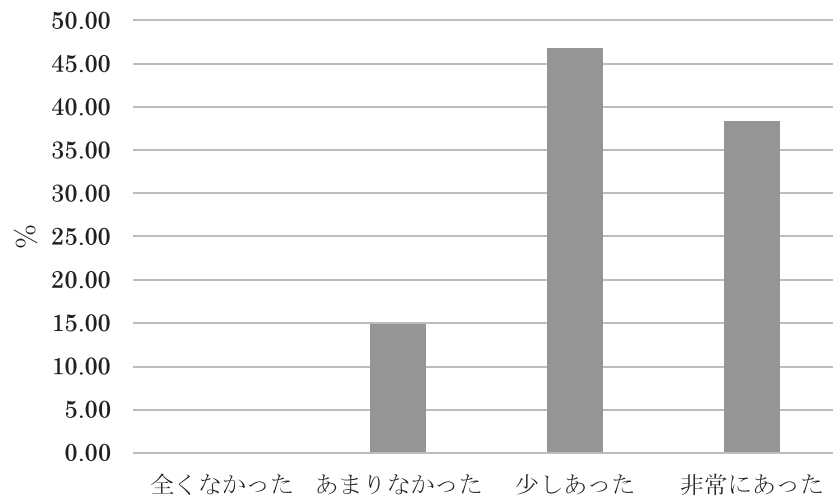


図1 「子どもとの関わり」における期待 (n=47)

「障害の有無に限らず、日々成長していること」や「私たちと同じで成長がゆっくりしている人というイメージになった」といった成長している姿を実感した意見が見られた。さらに、「職人のように器用に作業する姿は社会人同様であった」というように今まで持っていた特別な支援が必要な人々という印象から、社会の中にいる人々という印象が変わっていたり、「就職してもいいと思った」ように今後の自身の進路の選択肢として考えていたりする実習生もいた。

3) 特別支援教育実習に対する期待や不安

特支実習に対しての期待や不安を「子どもとの関わり」、「授業・指導案」、「特別支援教育への理解」、「経験の拡大」の4項目について質問した。以上の項目についてそれぞれ期待と不安の度合いを「非常にあった」、「少しあった」、「あまりなかった」、「全くなかった」の4件法で回答を求めた。また、特支実習を通して期待や不安は想定していたものと違いがあったか尋ね、その際に、具体的にどのようなことが想定していたものと違ったのか自由記述を求めた。

(1) 子どもとの関わり

特支実習を通じた子どもとの関わりについての期待や不安について質問した結果、期待があったのは全体の85.1%であった。一方、不安があったのは全体の91.5%であった。

実習生の中で「子どもとの関わり」を非常に期待していたのは38.3%であり、少し期待していたのは46.8%であった(図1)。また、実習生の中で「子どもとの関わり」が非常に不安だったのは48.9%であり、少し不安だったのは42.6%であった(図2)。

さらに、特支実習において想定していたものと異なると思ったのは70.2%であり、具体的な内容としては、「思ったよりコミュニケーションがとれた」や「思ったより感情を示すのが上手だった」といった想定していた以上に関わりができたことに対するポジティブな意見があげられていた。また、「今までの実習より主体となって関わられた」や「感情や言語の表出が無くても読み取ろうとするとコミュニケーションが図れる」といった積極的に関わった意見もあげられていた。その一方で、「中学、高等部は奇行が怖い」や「言葉を交わせると思っていた」というような意

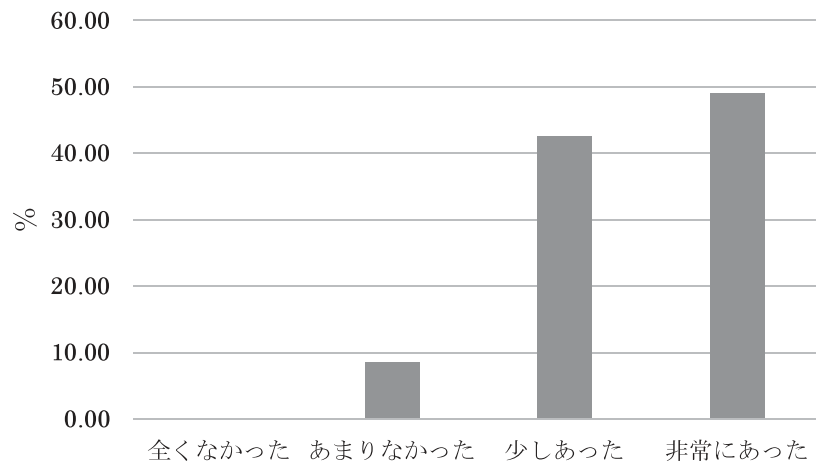


図2 「子どもとの関わり」における不安 (n=47)

見があった。

以上のように、子どもとの関わりにおいては、8割以上の実習生が期待も不安も感じていた。また、7割の実習生が想定していたものと異なったということからも、今まであまり接触経験のない児童生徒との関わり方に不安はあったものの、「身構えすぎず、健常の子どもと同様に接したらよい」という意見があったように、今までの経験を基に子どもたちと関わりたいという期待もあったと考える。

(2) 授業・指導案

特支実習における授業・指導案についての期待や不安について質問した結果、期待があったのは全体の60.6%であった。一方で、不安があったのは全体の93.6%であった。

実習生の中で「授業・指導案」を非常に期待していたのは11.1%であり、少し期待していたのは48.9%であった(図3)。また、実習生の中で「授業・指導案」が非常に不安だったのは80.9%であり、少し不安だったのは12.8%であった(図4)。

さらに、特支実習において想定していたものと異なると思ったのは67.4%であり、具体的な内容としては、「教科学習がない」や「教科書が無く自由にできる」、「自立活動や遊びの授業を行うクラスもあった」といった今までの小学校実習とは異なる指導方法に関することや、「一緒に授業を行う先生方との連携のメリットを感じた」ようにTTによる授業形態についても意見があった。また、小学校実習にいておらず、保育所・幼稚園実習のみ経験している実習生もいたが、「重度の子どもの授業は保育で学んだことが役立った」というように保育で学んだことを活かしたようだ。一方で、「子どもに合った指導案作りが難しい」や「発達段階の違う子どもが全員参加できるようにすることが難しい」というような個別の配慮を考えた指導案作成や授業展開に困難さを感じていた意見も多かった。

以上より、授業や指導案に関しては、全体的に不安が高く、その理由としては今までの実習で経験したことのない指導案の書き方や授業形態があげられる。しかし、そのような中でも「子どもによっては小学校の教科書を使ったり、キャラクターを用いて興味を持たせたりするのがとて

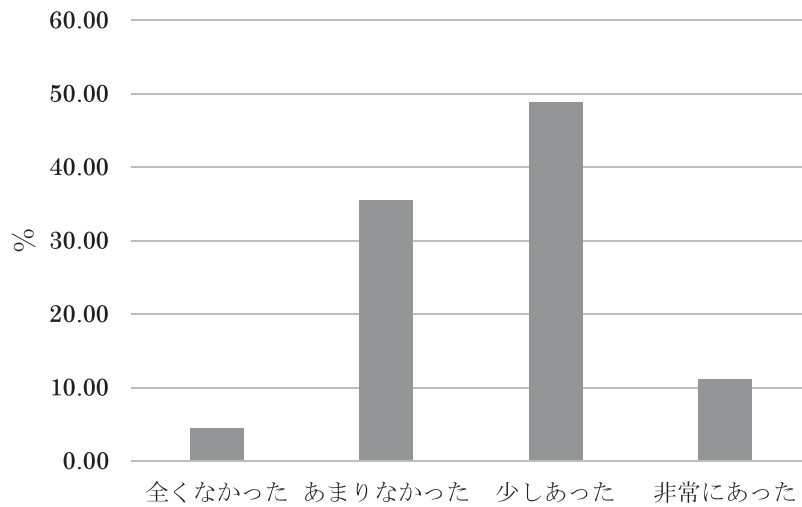


図3 「授業・指導案」における期待 (n=45)

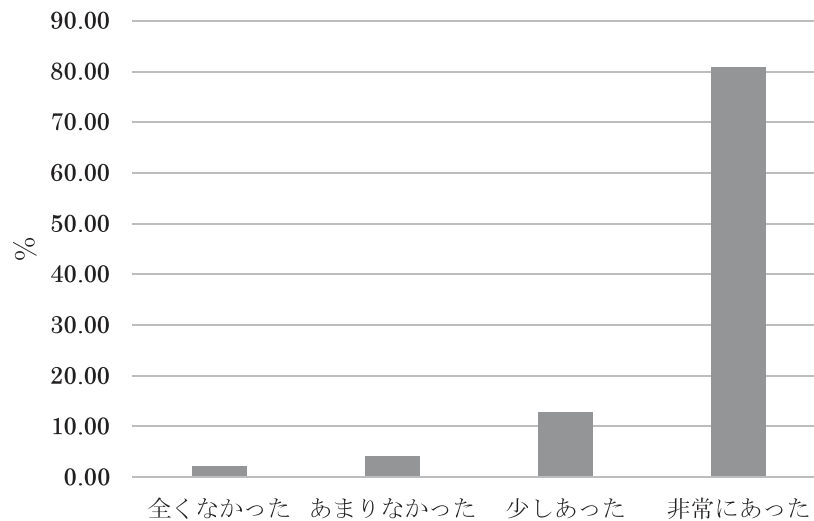


図4 「授業・指導案」における不安 (n=47)

も面白かった」というような個別の配慮をすることで工夫できる授業の楽しさに気づいた実習生もいた。

(3) 特別支援教育への理解

特支実習を通じた特別支援教育への理解についての期待や不安について質問した結果、期待があったのは全体の91.3%であった。また、不安があったのは全体の78.3%であった。

実習生の中で「特別支援教育への理解」を非常に期待していたのは34.8%であり、少し期待していたのは56.5%であった(図5)。また、実習生の中で「特別支援教育への理解」が非常に不安だったのは20.1%であり、少し不安だったのは52.1%であった(図6)。

さらに、特支実習において想定していたものと異なると思ったのは28.9%であり、具体的な

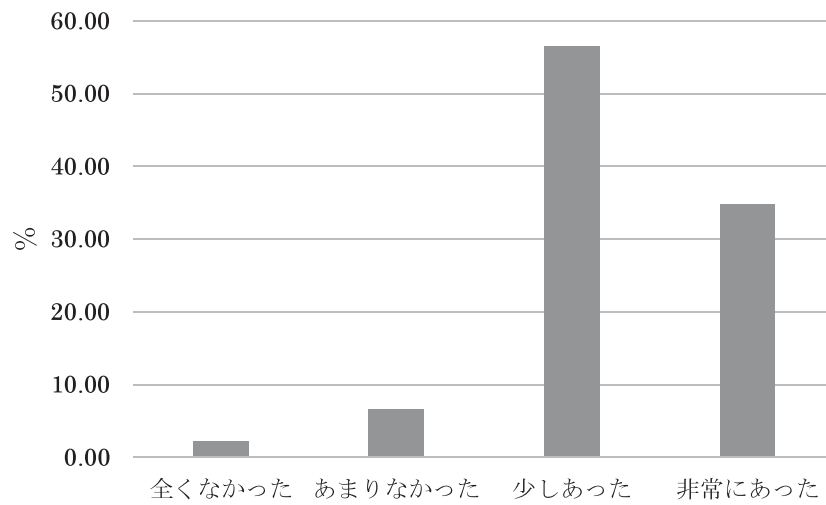


図5 「特別支援教育への理解」における期待 (n=46)

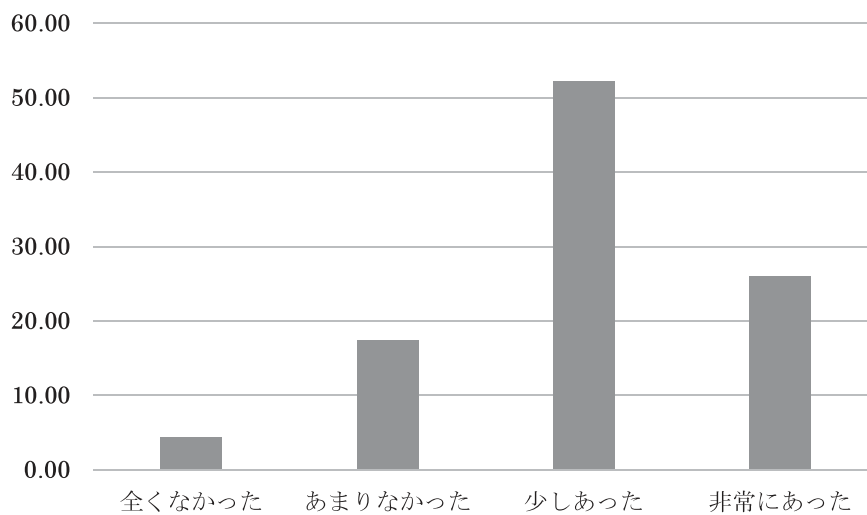


図6 「特別支援教育への理解」における不安 (n=46)

内容としては、「教師が主となって教育を進めてくのではなく、保護者としっかり情報共有して、子ども自身で決める場面が多いこと」や「個別対応、T1、T2などについて学べた」というように実際の教育実践を目の当たりにして特別支援教育の専門性を理解した意見があった一方で、「授業で習ったより現場は深刻」というような現実的な問題とも向き合った経験があった。

以上より、特別支援教育への理解については期待が高かったと考えられる。そのため、想定していたものと異なると感じたのは約3割だが、その中においても「子どもの障害についての理解をもう少ししておけばよかった」や「子どものよいところを見付けて伸ばすことが大切」といった前向きに学ぶ必要性を実感したという意見があがっていた。

(4) 経験の拡大

特支実習を通じた経験の拡大についての期待や不安について質問した結果、期待があったのは

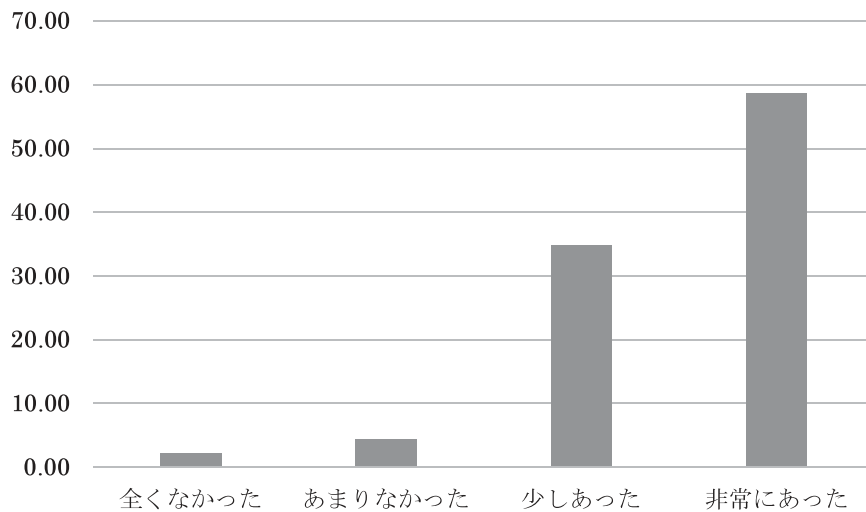


図7 「経験の拡大」における期待 (n=46)

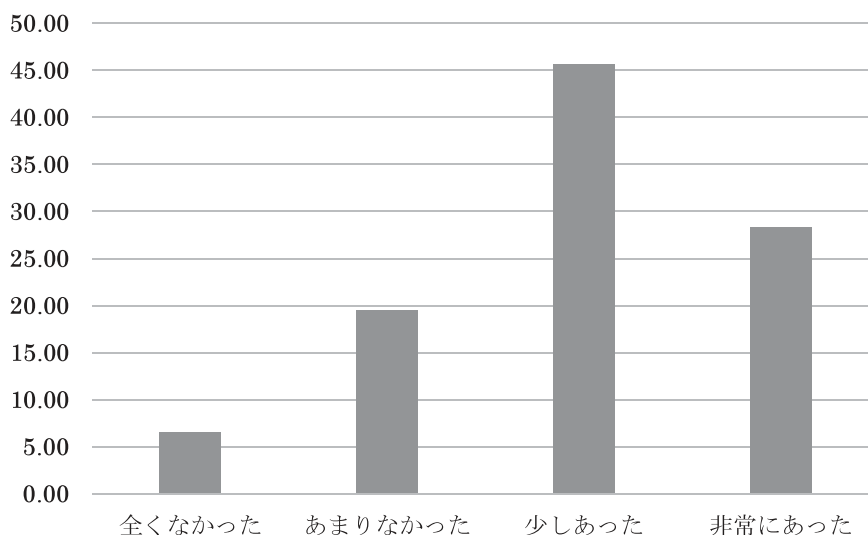


図8 「経験の拡大」における不安 (n=46)

全体の93.5%であった。一方で、不安があったのは全体の73.9%であった。

実習生の中で「経験の拡大」を非常に期待していたのは58.7%であり、少し期待していたのは34.8%であった(図7)。また、実習生の中で「経験の拡大」が非常に不安だったのは28.3%であり、少し不安だったのは45.7%であった(図8)。

さらに、特支実習において想定していたものと異なると思ったのは40.5%であり、具体的な内容としては、「知識や指導法を詳しく学べた」や「食事介助、排せつ処理等」といった知識や具体的な支援方法を学んだという意見が多かった。また、それらの理由として「学ぶこととは違い、実際に経験できると得るものが多かった」や「机上の学習を実際に関わることで生かしたり、失敗したりできた」といった実際に子どもたちと関わる経験があったことで様々な経験ができた

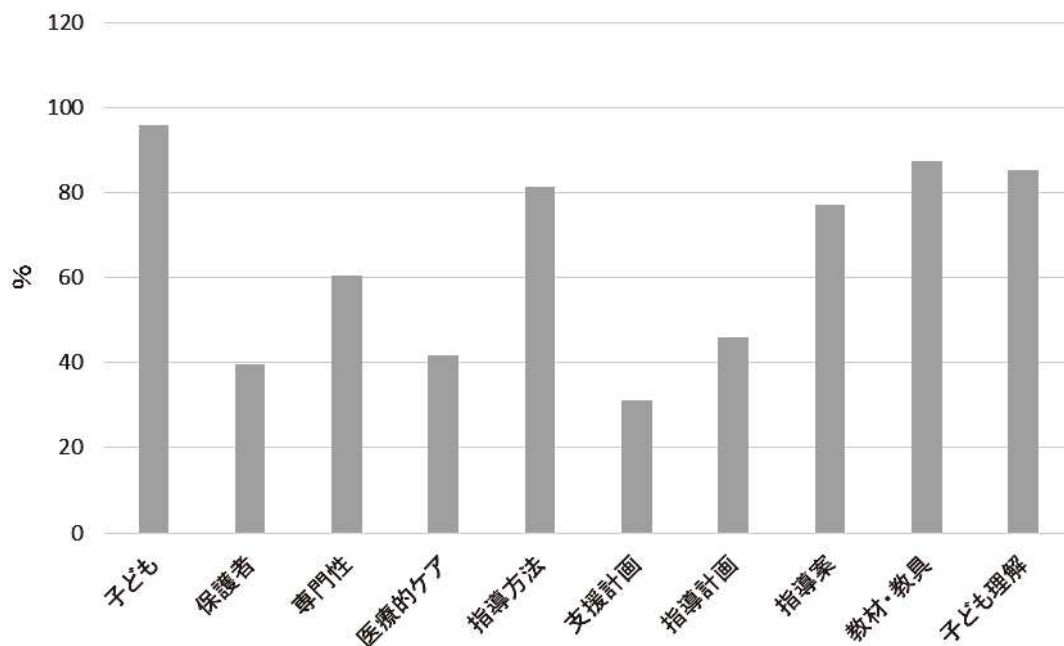


図9 特支実習を通じた学び (n=48)

と実感している。

以上より、特支実習を通じた経験の拡大については期待もある中で、「視野が広がった」というような実習以外での考え方にも変化があった意見があった。ただ、見通しのもてない実習であったからこそ少し不安があった実習生が約半数いたと考えられる。しかし、実習先では「無知であるため丁寧に先生方が教えてくださった」というように学びの機会があったことも経験の拡大に繋がっている。

4) 特別支援教育実習を通じた学び

特支実習を通してどのような学びがあったのか、10項目から当てはまるものを選択してもらった。その際、当てはまるものには複数回答してよいこととした。また、これら10項目以外にある場合には、その他として自由回答してもらった。

その結果、最も学びがあったのは「子どもとの関わり」で95.8%になった。次に多かった項目は、「教材・教具」で87.5%であった。その次は「子ども理解」の85.4%であった(図9)。

以上より、特支実習を通じた学びとしては子どもとの関わりや子ども理解といった子ども自身についてのことや、教材・教具、指導案といった授業の内容に関することが多くあがっている。自由記述の中には「家庭が抱えている問題について」や「保護者の知識は豊富」のように家庭との関わりについてもあがっていることから、実習校によっては家庭との連携についても学ぶ機会があったと考えられる。実際に実習生が接する機会の多かったものを学ぶことができた実感していることが推察される。

5) 特別支援教育実習の学びの活用

特支実習での学びが、保育者・教育者になった時にどのような場面で活用できるのか、10項

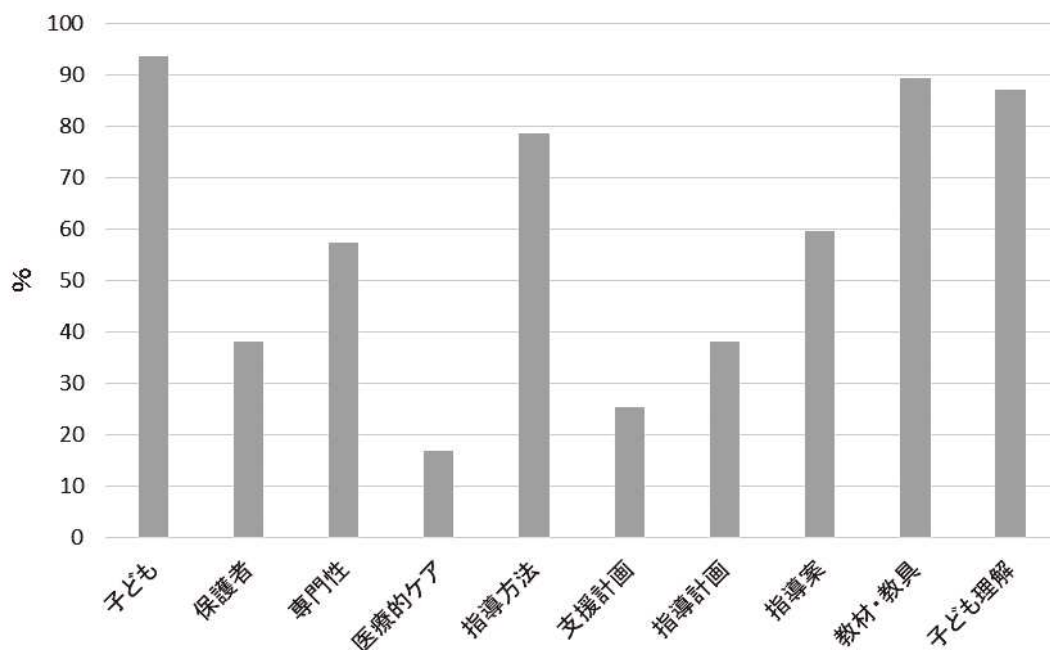


図10 特支実習を通じた学びの活用 (n=47)

目から当てはまるものを選択してもらった。その際、当てはまるものには複数回答してよいこととした。また、これら10項目以外にある場合には、その他として自由回答してもらった。

その結果、学びが最も活用できる場面としてあがったのは、「子どもとの関わり」で93.6%になった。次に多かった項目は、「教材・教具」で89.4%であった。その次は「子ども理解」の87.2%である(図10)。

その他には、「個別指導計画があったからうまく指導に結びつけた」というように個別の指導計画の活用について具体的に示してあり、実習生によっては担当指導教員とともに個別の指導計画を参照しながら授業計画や指導案作成をするという経験ができています。以上より、特支実習において学んだことが実際に保育者・教育者になったときに活用できると考えられる。

4. 総合考察

本研究では、特支実習の初年度実施における実習生の期待や不安、学びについて明らかにした。その結果、特支実習に関しては「特別支援教育の理解」、「経験の拡大」は9割以上の実習生が期待していたのに対し、「授業・指導案」に関しては期待していたのは6割、不安があったのは9割であった。このことから授業や指導案作成に関しては、実習生にとって不安が高い要因であったと考えられる。また、「子どもとの関わり」については、期待も不安も8割以上でありどちらも高かった。大野木ら(1996)が行った教育実習不安の構造に関する結果では、授業実践力と児童・生徒関係においては高い正の相関が見られているように、授業中での子どもたちとの関わりと授業に関する不安は関係がある。本学の実習生は特支実習以前には保育所・幼稚園・小学校での保育・教育実習を経験しており、その際には保育案・指導案を作成している。しかし、特別支

援学校における指導案や授業形態の違いから不安が高まり、また、子どもたちの実態がわからないからこそ今までの経験では対応できないことへの不安もあったと考える。そのため、これらの項目では6割以上の実習生が想定していたものと異なっていたという意見だった。指導案の作成については、実習の経験がある先輩から話を聞いたり、資料をもらったりすることで解決できることもあるだろうが、本研究の対象となった実習生は本校において特支実習を行った1期生であるために、そのような情報を得る手段がなかったため、見通しがもてないことへの不安もあった可能性も考えられる。

また、特支実習を通すことで実習生が得た学びや今後活用できる内容としては、子どもとの関わり方や子ども理解といった子どもたちに関することや教材・教具や指導方法といった授業に関することが多くあがっていた。上述したように、実習生にとって授業に関することや子どもとの関わりは不安のある中で実習を行ってきたが、実際にはそれら不安を乗り越えてこれから保育者・教育者になっていく者として最も糧になった経験であったと考えられる。

本研究の課題としては、初年度に実習を行った学生の実習後に振り返ることで不安や期待、学びについては明らかになったが、実習前との比較が必要と考える。そのため、初年度での実習の経験を活かした事前指導を行い、その際に実習における期待や不安を調査することが必要となる。

引用文献

- 池田浩明・小川 透・武石詔吾（2013）特別支援学校の教育実習における学生の意識について（2）—期待・不安及び意見・要望に関するアンケート調査から—，藤女子大学人間生活学部紀要第50号，95-102.
- 文部科学省（2016）「特別支援学校教諭の免許資格を取得することのできる大学」。
http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/kyoin/daigaku/detail/1287085.htm（2018/1/11 情報取得）
- 文部科学省（2015）「特別支援学校教諭免許状の保有率の向上・特別支援教育の概要について」。
<http://www.u-gakugei.ac.jp/~soumuren/27.6.11/monka/t01menkyohoyuritu.pdf>（2018/1/15 情報取得）
- 仲宗根森敦・高柳真人・谷川尚巳・中野友博・川合英之・黒澤寛己・大西祐司・安倍健太郎・柴田俊和（2017）教育実習事前指導・教育実践演習を通じた学習成果に関する研究：3年次生と4年次生の関わりから，びわこ成蹊スポーツ大学研究紀要第14号，131-146.
- 大野木裕明・宮川光司（1996）教育実習不安の構造と変化，教育心理学研究第44号，454-462.
- 坂田花子・東平明子・江田裕介（2007）附属特別支援学校における教育実習の在り方について探る—教育実習生への調査を通して—，和歌山大学教育学部教育実践総合センター紀要第17号，111-119.